

# 松森胤保の博物図譜作成へ向けた蒐集活動 ——『家蔵五玩雑録』の蒐集記事から——

安 田 容 子

## 1. はじめに

庄内地方における近代の科学者と称される松森胤保についての研究は、磯野直秀らによる、『両羽博物図譜』（山形県指定文化財）を中心とした研究がある<sup>1</sup>。松森胤保は、中村（1947）により、「明治の初年未だ科学が普及して居なかった時代に独学を以て科学を研鑽して、これを以て政治を行い大衆を導かんとした偉大なる学者<sup>2</sup>」と評されるように、科学者である一方、江戸期には鶴岡藩の支藩である松山藩の付家老を務め、明治期には中学校長や山形県会議員などを務めるなど、地域行政にもかかわっていた<sup>3</sup>。

代表作とされる『両羽博物図譜』をはじめ、500冊以上にのぼる著作を独りで著しており、そのほとんどが現在も伝えられている<sup>4</sup>。彼の業績の一つに、ものを蒐集し、その記録を取っていたことがあげられる。『家蔵五玩雑録』や『弄石余談』、『大泉珎禽写真画譜』など、彼の手による蒐集物の記録が現在ものこされている。

開物学についての論説をまとめた『南郊開物径歴』において、明治21年（1888）に執筆された序文には、彼が志し願う5つの事があげられているが、そのなかに、「博く海の内外を遊覧し、賢人君子及び名士大家に就て之を謀り、以て予か不徳を修め、不能を救、智見を博くせんとするにあり、」

また、「閑を得て、或花草珍樹を弄し、或鳥魚を狩り、或は之を飼育し、或は大古の土器、石器及び野蛮粗木の器より文明の工器を会集し、優遊以て日を送らんと欲するに在なり、」と、国内外の人々と交わることで見識を博くしたいこと、時間があれば鳥や魚、土器・石器などを蒐集したいことをあげている。

本研究では、松森胤保にとって、志し願うことの一つであった蒐集という行為に着目し、彼の著した蒐集記録『家蔵五玩雑録』と蒐集に関わる人物交流記録『遠客珍聞』（光丘文庫蔵）の記事から、彼の蒐集活動のなかでも、特に彼が好んでいた鳥類の蒐集活動が『家蔵五玩雑録』にどのように記されているか、また、『兩羽博物図譜』の作成にどう関わってきたか、松森胤保が蒐集を積極的に行っていた明治10年代を中心に、彼と息子たちの蒐集記録を合わせながら、松森家における蒐集記録と蒐集物の継承についてもみていく。

松森胤保が自家の家譜としてまとめた『長坂氏略世家』（光丘文庫蔵）によれば、胤保は6人兄弟の長男であり、次弟には弥大夫貞立、三弟に又之進義兼、四弟・匠作兼胤、五弟・百八郎正胤、六弟・六弥太胤秀の5人の弟がいる。この弟たちのうち、四男の匠作と六男の六弥太は、胤保同様に蒐集活動も行っていた人物である。六弥太は後に樋越氏になるが、古銭の蒐集家として、『栄寿堂錢譜』（国会図書館蔵）などの蒐集記録を胤保と同じようにのこしている。また、胤保には又次郎、昌三、岩雄の3人の息子もいたが、彼らもまた、胤保にならって蒐集活動を行っていた。特に、又次郎と昌三は鳥や植物を好んでいたことが、胤保の記録『百年間談』にも記録されており、彼らの蒐集記録もいくつか現存している。

## 2. 松森胤保の蒐集記録と活動

松森胤保の著作は、彼自身による著作目録『南郊著述目録』（光丘文庫蔵）

には、明治20年（1887）に77部263冊の著作が記されており、そのほとんどが現存している。さらに、目録には含まれなかった著作や、日記類も含めれば、500冊以上にもにのぼる。『両羽博物図譜』をはじめ、いずれも出版されることはなかったが、彼自身は目録のなかで、自身の著作に印をつけ、以下の4つに分類している。

- 1 必世に公にせん事を欲する者（12部）
- 2 修正を加へて世に公にせんと欲する者（5部）
- 3 苟も著書と称し人に示すも可なる者（22部）
- 4 未だ著書と称す可ならざる者（46部）

この目録の中で、彼の蒐集記録は「物類録」に分類され、いずれも人に見せるべきではないものとする印がつけられている。「物類録」には、『培植録』や『畜養録』など、家の中で栽培したり飼育したりしていた動植物の記録など合わせて10点の著作が記されているが、蝶の蒐集記録である『胡蝶録』や、蒐集に関わる交流記録である『遠客珎聞』など、本目録作成以後に著した作品については、本目録には掲載されていない。また、「物類録」に分類される著作は全て著書と称すべきものではないとする印が付けられており、公に公表すべき記録ではなく、彼自身の個人記録であるととらえていた。『家蔵五玩雑録』についても、「此書は予か手に付集會せし珎奇の物を記する所なり」と説明しており、胤保の手による、個人的な蒐集物の記録と考えていたことがわかる。

『家蔵五玩雑録』全5冊は、松森胤保が幼少の頃より、晩年の明治21年までの蒐集物が記録されている。いつ、どこで、だれと、または誰から蒐集したものであるのかという情報と蒐集物の図によって構成されており、彼の蒐集物の目録となっている。

第一冊目の序文は慶應二年に記されおり、本文もそのころからの記録であるが、日記などにも蒐集記録をつけていたようであり、それらをもとにして図や内容を記しているようである<sup>5</sup>。五玩とは、貴石・鉱石や化石などの「玉石」、貝がら類の「貝螺」、珍しい植物などの「草木」、昆虫を中心に鳥や小動物類の「禽虫」、石器・土器から海外の小物などまでを含む「人巧」の5部門のことである。

### 序

五玩雜録何謂乎、一云玉石之類、二云貝螺之類、三云草木之類、四云禽虫之類、五云人巧之類、之間五不可拱日用石不足為珍寶雖然乎、奇や妙や  
可玩可弄者命之為玩五玩改異、其類一類之中亦異、其類然含而記之依命曰之雜録矣、終曰静観此五玩源通其妙用之理有、廣幾窺造化之變乎、呵々

于時慶應二丙寅年正月十日於松山 御殿前之邸誌

『家蔵五玩雜録』は、第一冊、第三冊から第五冊が、五玩となる物品の蒐集記録であり、第二冊のみが石器と鉱物の蒐集記録に特化している。第二冊については、内題が「五宝図譜」とあり、記事も年代順に綴られていない。執筆当時は『五宝図譜』という題で、五玩の中でも玉石、特に石器類に絞った蒐集記録とする予定であったが、製本時に『家蔵五玩雜録』の第二冊目としたようである。明治11年（1878）ころまでに蒐集した玉石類について、種類毎に分類して記した記録である。『家蔵五玩雜録』と平行して『五宝図譜』として著していたようであるが、明治11年に、『五宝図譜』を廃して『五玩雜録』に組み入れたことを第二冊の序文のなかで述べている。

松森胤保の博物図譜作成へ向けた蒐集活動

各冊を構成する蒐集年月は以下の通りである。

第一冊：幼少時～明治5年

第二冊：万延元年～明治11年（玉石に限る）

第三冊：明治6年2月～明治11年7月

第四冊：明治11年7月～明治12年4月

第五冊：明治12年4月～明治22年

各冊に記録される五玩の数は表1に示す通りである。記録されているだけでも、松森胤保は716点にもなる蒐集物を蒐集していたことが分かる。『家蔵五玩雑録』の蒐集物のおよそ半分近くが「玉石」に占められている。

松森胤保は、明治10年から明治20年代にかけて、積極的に蒐集活動を行っているが、この時期の蒐集物は五玩のなかでも、「玉石」以外では、石鏃や土器などの蒐集に力をいれている。また、蒐集方法も、石器や土器、鉞物については近隣の山などで採集することもあったが、一方で、珍しい石や、石器、動植物については、古物商や鳥屋などから購入しているものもあることが、値段の記録からもわかる<sup>6</sup>。

表1 『家蔵五玩雑録』に記録された蒐集物

	第一冊	第三冊	第四冊	第五冊	合計
玉石	72	65	146	35	318
貝螺	18	8	13	12	51
草木	23	26	20	13	82
禽虫	44	25	9	31	109
人巧（同時代のもの）	13	7	2	6	28
人巧（石器など古物）	0	29	59	40	128
合計	170	160	249	137	716

蒐集物のうち、「禽虫」に関してみると、蒐集した動物は、蒐集物全体から見るとその割合は少なく、セミやカゲロウ、ハチなどの昆虫が主であるが、特に変わった形のもの、珍しいものについては、図とともにが記録されている。昆虫のほかには、カニや魚、鳥の一部やネズミなど小動物の死骸などである。蒐集方法は、慶応年間までは鳥刺などによる採集が主な蒐集活動であり、ほかに知人からの土産や出入りの魚屋から手に入れたものであったが、明治期には鳥屋から購入したり、家族や知人と自身の蒐集物と交換したりしているものもある。『家蔵五玩雑録』に記載するこれらの動物の情報は、蒐集した鳥の羽根や巣、生皮などであり、生きたものの飼育記録などは本書には記していない。『家蔵五玩雑録』の蒐集物について、「禽虫」についてみると、飼育目的で入手したものについてではなく、あまり見ることの出来ない珍しいもの、かたちのよいものについての記録である。これらを記録してのこしておくために本書を作成したと考えられる。

### 3. 『家蔵五玩雑録』にみる蒐集仲間

#### 3-1. 松森胤保の息子たちによる蒐集記録

松森胤保の家族もまた、ものの蒐集・愛玩を好んでいた。『長坂氏略世家』には、父親の長坂市右衛門治禮は、隠居後には「閑に花草を弄し幼孫〔又次郎也〕を愛して更に他求する所なし」と植物を愛玩していたことが述べられる。また、胤保の母親も、息子の胤保が蒐集を好んでいたからか、自ら庭で採集したカゲロウなどを胤保に譲っていることが『五玩雑録』第一冊にみえる。さらに、第一冊に記録された、胤保が若い頃の蒐集活動の記録には、氏家叔父と阿部伯父という二人のおじの名前がしばしば登場し、これらのおじと共に採集活動に出かけたり、土産をもらってりしている。胤保の弟たちもまた、蒐集仲間としてその名前が記録されている。三番目の弟・又之進兼兼、四番目の弟・匠作兼胤、六番目の弟・六弥太胤秀の名前は多い。特に六

弥太については、一緒に採集に出かけた記録もあり、彼自身も蒐集活動を好んでいたことがみえる。

『家蔵五玩雜録』全5冊のうち、その大部分といえる第三冊・第四冊・第五冊は明治11年から12年の記録が中心となっている。松森胤保がものの蒐集を積極的に行っていた時期であるが、この時期は、自身の手による採集だけでなく、鳥屋や古物商からの購入や、知人や家族の蒐集物と自身の蒐集物を交換することによって、コレクションを充実させていった。この時期には、胤保が蒐集記録をのこしたのと同様に息子たちもまた蒐集物についての記録をのこしており、一部現存している。この2人は、父親の胤保同様に鳥類を好んでいたことが、胤保の自身の覚え書きともいえる『百年間談』中の「畜養の記」によれば、「畜養の記」を記した明治5年（1872）頃には小鳥の飼育を又次郎と昌三に任せており、松森家には常に10羽から20羽の小鳥が飼育されていた。

胤保の長男・又次郎は、明治11年に、胤保の『家蔵五玩雜録』と同じ形式で図入りの蒐集記録をのこしている。表題はついていないが、慶応4年（1868）から明治11年までの蒐集物の記録となっている。慶應4年から明治10年までの蒐集物について、図と覚えている範囲での入手先についての記録にとどまるが、明治11年の蒐集物については、月日と入手先についても詳しく記していることから、明治11年に執筆しはじめた記録であるといえる。又次郎の蒐集物は、胤保同様、自身の手によって採集したもののほか、家族や知人から譲り受けたり交換したりしたものもある。父親の胤保から譲り受けているものもある。『家蔵五玩雜録』に記されているものについてみると、胤保が母親からもらったカゲロウや、慶応元年に日光で採集したサルオカゼ12種の一部などが又次郎へ譲られている。また、明治11年1月には、「一月中、家君より賜ふ所の諸州の名石及び各種土石、今左に図するに同種の石数甚多きものと雖とも限るに七八個を以てす」と、胤保から譲り受

けた47種類の石を記録している（図1）。この石類についても、胤保の『五玩雑録』の明治11年1月の記録には、石を又次郎に譲ったことについての記録はないが、胤保自身が蒐集したときの記録は『家蔵五玩雑録』に記されているものと同定することができる。この石のなかで、「陸奥南部恐山之舍利石」は、『家蔵五玩雑録』第一冊において、天保4年（1833）に胤保の母親が六十六部から入手したものを胤保が譲り受けたものに加え、嘉永6年（1854）に弟の六弥太から古銭と引き替えに入手した蒐集物として記録されている（図2）。

一舍利石三 （石三つの図）名石之内

右之内尤能品一ハ此年大凶荒ニて民餓死ニ至もの有時、三十六部の来りぬれハ母上憐ませ給て食を與へ給ひしかハ、礼物也として此物を贈れり、同人の中品ハ南部ヲワレ山の産ニして尤至りし所也しと聞ゆれと如何あ

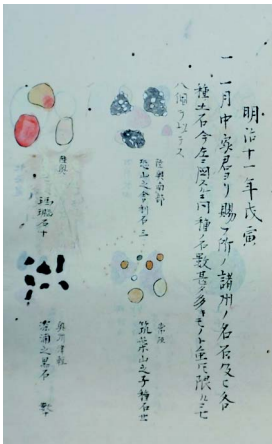


図1 又次郎の蒐集記録より「恐山之舍利石 三」

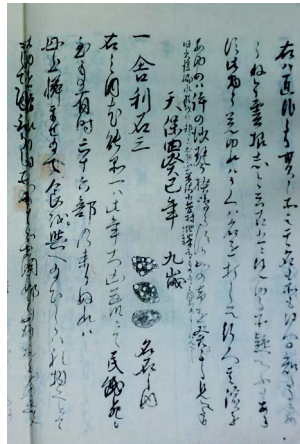


図2 松森胤保『家蔵五玩雑録』第一冊より「舍利石 三」



らん乎、津軽ニ舍利濱ありと聞ゆれと〔之も〕得し所ニして如何成品を産すると云事能知らず、舍利濱の産也とて飯粒の如ニして堅光の石を見し事もあれと、此物と大ニ殊也、又三才図会ニ今別を以其所とし、津軽瑪瑙を以舍利石と云の説をも挙たり、彼是混し合たるに似たり、又同書ニ一種の舍利石を載たるハ、則此物成ニ似たりと今別より在もの出を聞かず、是又如何あらん乎、其後嘉永六癸丑年の頃、六弥太か川井平八より仕物ニツ三ツ貫来しを古銭と引かへ、能ものニツを同蔵しぬ、件の平八も早頃六十六部よりもらいしと聞内、此所江委しく誌ぬれハ癸丑の記ニハ略しぬ

一方、二男の昌三も、胤保の『家蔵五玩雜録』にもとづいた蒐集物の記録を2冊の日記にのこしている。『日記一』は明治3年(1870)から明治10年までの記録となっており、昌三が九歳からの記録である。特に鳥刺しと釣りの記録が中心となっており、文章に釣った魚の図を添える以外に、別紙に描いた鳥の図や魚の拓本を切り抜いたものを貼り付けてた記録となっている。『日記二』は明治10年から明治12年、十五歳から十七歳までの記録である。この時期には、鳥刺しの記録だけでなく、石器や土器、貝の化石など、胤保の『五玩雜録』中に記される蒐集物と同様のものの蒐集も行っており、内容も胤保の『五玩雜録』に記載される蒐集物と同じような種類のものが同じように記載されたものとなっている。昌三の蒐集物の入手先は、自身による採集のほか、父親、叔父の匠作や兄の又次郎、弟の岩雄、その他、羽柴祐輔や家を訪れた人々など、胤保と同じように多岐にわたる。

胤保の息子たちは、自分たちの交友関係に加え、父親である胤保の交流に影響を受けた交流をとおして、それぞれに興味のあるものを蒐集し、場合によっては蒐集物を交換しながら保存していくことで、自身のコレクションを充実させていった。胤保だけでなく、息子たちも同様の行動をとっていたこ

とは、蒐集物の記録だけでなく、蒐集物そのものも引き継がれていったと見ることが出来る。

### 3-2. 胤保と昌三の記録にみるミミズク

昌三の『日記二』に記されている蒐集物のなかには、胤保の『五玩雑録』に記録されているものと重複するものも多数みられた。明治11年2月17日のミミズクの記録など、鳥類の剥製に関する記録は重複してそれぞれの蒐集記録に記録されている。昌三の『日記二』によれば、明治11年2月17日に、「相沢村、助右エ門ヨリ家ニ小臬・中角鴞ヲ持参」されたとある。胤保の『家蔵五玩雑録』第三冊にはこのミミズクについて、次のように述べられ、図は省略されている。胤保は、自身の手でミミズクの剥製を作成している。

一中ツク偶象

右ハ二月十七日朝，出入之會沢村助右衛門伴，小鴞一羽生捕いたし，持



図3 松森昌三『日記二』「中角鴞之図」



図4 松森胤保『大泉珍禽図譜』  
「中ツク」

参いたし呉，同夕右餌ニ此中ツク昨日■々胸ニキスあるを持参いたし呉ル，依而其夜半ニ而形を作り張抜ニシ，其皮をきせ■，図ハ大泉珎鳥図譜ニあり，依而略す，

昌三の『日記二』に添えられたミミズクの図「中鷗之図」(図3)は、胤保の『大泉諸鳥写真画譜』のミミズクの図「中ツク」(図4)とそっくり同じである。その一方で、昌三の図の部分は胤保の図を写しながらも、大きく異なる点もみられた。胤保の図では足の前爪が実物に正確に二爪になっているのに対して、昌三はそこにもう一つ爪を描き加えて前爪を三爪にしている。昌三は胤保の図を写しとりながら、普段親しんでいる小禽類と同じようにミミズクも三爪であると勘違いしたのかもしれない。このミミズクは最終的に『両羽禽類図譜』に「並中ヅク」として載せられる。このときの図は新たに描かれたものであるが、「明治十一年二月十七日写死 中耳ツク種之第壹品」とあり、明治11年に入手したものであることから、『家蔵五玩雑録』および『大泉珎禽画譜』、また昌三の『日記二』に記録されたミミズクと同じものであるといえる。

#### 4. 松森胤保による鳥類の蒐集と博物館

##### 4-1. 『博物図譜』作成のための蒐集

明治11年のミミズクにみるような鳥類の剥製の作成記録は、明治10年以降の『家蔵五玩雑録』中の鳥の蒐集記録にみることができる。第五冊の明治16年(1883)の記事においても、購入した鳥を剥製にしたことが述べられている。四月四日に、鶴岡の鳥屋で海鳥と姫鷗を入手し、それぞれ、5日と6日に「丸抜」にしている。これらの鳥については、両方とも、胤保は、剥製にするために手に入れたと考えられる。

四月四日

- 一 荒町鳥店にて二銭五厘を以て左の甲海鳥を得、  
十日町周賢町に於て  
左乙姫鷗を一銭にて得、甲は五日に丸抜に造り、  
乙は六日に造る



図5 『家蔵五玩雑録』第五冊「明治十六年四月四日」記事

『五玩雑録』に記された蒐集物には、安政2年4月22日の「灰毛生替雀の尾羽」をはじめ鳥の羽根の蒐集ははやくから行っている。明治10年代以降は、死骸や生皮を集めたり、喙や脚などの部分を貰ったりしている。例えば、明治15年10月13日に、羽柴雄輔との交易の中で、熊鷹(クマタカ)の尾と足、熊の爪をもらったこと、また同月30日には、羽柴へ小鳥の卵を8つ贈っている。

松森胤保が、明治10年代に積極的に鳥の羽根や卵、脚などを入手し、剥製を作成した目的についてみてみる。この時期には、『両羽禽類図譜』の序文を執筆して

いることから、すでに博物図譜の作成に手を付けていた時期とみることがができる。『両羽博物図譜』においても、動植物を蒐集したり、実際に見たりした年月日、および採集場所や購入経緯などが必ず書き留められている。これらは、『家蔵五玩雑録』や『大泉珎禽写真画譜』において、蒐集物の記録を取っていたことにもとづいている。明治11年から明治16年ころの、鳥の身体の一部や生皮などの積極的な蒐集は、『博物図譜』を作成するために必要な行為であったといえる。

明治16年に執筆された『両羽禽類図譜』の序文において、胤保は博物館の必要性を説き、日本においても博物館が設置されていることを述べる。加えて、西洋には「所謂博物専門の学ありて、其の中、更に鳥学専門の科を立

てて之に従事する者あり、従て其の書に於けるも、一にして足らざるを信ず」と、鳥類学が学問として成り立っているとする一方、日本においては博物書が少ないため、自身の手によって図譜を作成していると述べる。また、鳥類の蒐集に関して、「今、茲に五十九の老体を保つの中に於いて、或は猟し、或は養ひ、或は其の羽毛を貯、或は其の嘴、爪を蔵し、或は其の剥皮を収め、或は其の全体を剣して、或は其の巢を集め、或は其の卵を会するもの、既にして少々なりとせず、猶、足らず。」としており、蒐集をさらに充実させる必要性を感じていたようである。

『南郊著述目録』において、『兩羽博物図譜』は、「苟も著書と称し人に示すも可なる者」としての印が付されており、必ずしも公開することを目的としたものとして作成したものではなかった。しかし、自身の手で蒐集したものをもとに博物図譜を作成することで知識を博くすることは、彼の志し願うことの一つであり、博物図譜にすることで、蒐集物とその記録が人々に示されることについても考えていたはずである。そのためには、多くの蒐集物が必要であり、それを記録することもまた、彼にとって博物図譜を完成させるためには必要なことであったといえる。ただし、彼にとっては、蒐集物全てというよりも、かたちのよいものや珍しいもののみを集め、記録することが重要であったようである。

#### 4-2. 『遠客瑣聞』にみる博物図譜を通じた交流

『家蔵五玩雜録』の五冊目の明治21年11月の項目のある部分には、『遠客瑣聞』でとりあげられているフランス人、ダルベルの名刺がはさみ込まれ、本文には、ダルベルとの交流および、彼から入手した石について記述がある。それによれば、ダルベルから入手した石は鑛石であり、54点であったことが『遠客瑣聞』に記されている。

『遠客瑣聞』は松森胤保の著作でも晩年にまとめられた、鶴岡を訪れた博

物学者・蒐集家・美術商等7人との交遊と彼らとの談話の記録である。本書に記された交流人とは、いずれも明治十年代に鶴岡や酒田において面会、談話を行っている。裏表紙見返しの書き入れから、本書は胤保没後の明治23年12月4日に二男の昌三が製本したものである。序文は明治21年11月27日に書かれており、本文中に交流が記された、フランス人のダルベルが来ることにあたり、「若し弥聞もあらば、記して他日の用に供するも一益なきにはあるべからず」と思い綴り置いたものであるとしている。目録には、1 佛国人チュルペン（耶蘇教師）、2 伊予人佐々木猛綱（博物家・骨相家）、3 清朝人王藩清（詩文家・書画家）、4 東京時計師門人、5 佛国人ホーリ及びダルベル（耶蘇旧教師・博物採集人）、6 土州古銭家風山軒（古銭家風山軒）、7 東京書画商岩本忠蔵（書画商）、8 秋田県人狩野徳蔵（出羽戦記著述者）の8名が記されている。これらの人物との交流はおよそ明治十年代のことである。牧師、文人、時計師、博物学者、古銭収集家、画商と多岐にわたるが、いずれも、ものを通じた交流となっている。そのなかでも、本書を執筆するきっかけともなった、「博物採集人」と記載されたフランス人のホーリとダルベルとの交流は、蒐集の中でも、博物図譜作成にかかわる交流である。

フランス人ホーリ及びダルベルとの交流は明治21年11月16日にはじまる。本書の序文は、11月27日のダルベル来訪の日に書かれたものである。このホーリ及びダルベルについては不明な点が多いが、『遠客弥聞』の記述と『家蔵五玩雑録』中に挟み込まれた名刺から、ダルベルは来日した牧師であることがわかる。ホーリはパリの博物館の関係者であり、植物の専門家であると『遠客弥聞』には説明されている。

『遠客弥聞』中の彼らとの交流にかんする記録は、12の項目に分かれている。ホーリは、パリの博物館に収める動植物のうち、日本産および北海道産のものを収集するために来日したとある。鶴岡へは北海道へ訪れる途中で佐度から訪れたものである。鶴岡に一泊した際に松森胤保との談話に至ってい

る。胤保ははじめホーリに対して鳥類についての質問をしたが、彼が鳥類に詳しくないことから、自作の草木図譜<sup>7</sup>を見せながら植物について語り合った。

ホーリは、胤保の図譜が、野生種だけでなく品種改良の観賞用植物を図示したり、穀物や野菜類など有用の産業植物を後方に提示しているのはなぜかと胤保に質問をしている。それに対して、胤保は、品種改良種の図示については、本書は庭園に植える観賞用の植物が主なものであるため、野生のもの、人造のものに関わらず図示しているとした上で、世上の博物図譜類には実用植物を記したものはあるが、無用とされる鑑賞用の植物について記した書物が少ないため、鑑賞用植物を載せていると説明し、胤保にとって、図譜作成において、観賞植物の記録という、ほかの図譜にはあまり取り入れられない事柄を積極的に取り入れている理由が示されている。

フランス人たちは、胤保の植物図譜について評価し、また、彼から博物図譜作成にかんする考えや動植物についての知見を聞くことで、胤保を「其外の諸国に於ては頗る有名の士を尽すと雖も未た一人の君か如き人を見ず、」と評価し、胤保に会ったことをパリの博物館に知らせることを約束したようである。

## 5. おわりに

松森胤保にとって、飼育を目的としない、鳥の羽根や卵の蒐集や剥製の作成とそれらの情報について記録していたことは、彼の博物図譜の作成に直接つながる行為であり、記録であった。明治21年のホーリ及びダリベルとの交流は、彼にとっては、博物図譜の作成と同様に、志し願うことの一つをかなえる行為であった。胤保自身の蒐集活動を下地にした博物図譜が大分できあがっていた時期であったから可能な交流であったといえる。

『両羽博物図譜』は、松森胤保にとって、晩年に作成した大作であるが、

その作成に至るには、『家蔵五玩雑録』に記録されている蒐集物の記録がその基盤となっている。さらに、彼の息子たちもまた同様に蒐集活動を行い、記録ものこしていたことが、松森胤保の著作の大部分が現在まで伝わっていることにつながっていると考えられる。

〈注〉

- 1 磯野直秀解説（1988）鳥獣虫魚譜 松森胤保 [両羽博物図譜の世界], 博物図譜ライブラリー2, 八坂書房。磯野直秀（1989-1991）『両羽博物図譜』の研究 1~6, 慶應義塾大学日吉紀要・自然科学. など
- 2 中村清二（1947）幕末明治の隠れたる科学者松森胤保, 自文堂。
- 3 明治期の松森胤保の活動については、『松山町史 下巻』（1989）pp.558-596., また、志田正市（1989）郷土の偉才松森胤保, 松森胤保翁顕彰会. に詳しい。羽柴雄輔については, pp.596-601. に詳しい。
- 4 松森胤保の著作は現在、酒田市立図書館光丘文庫と松森写真館において保存されている。本研究で取り扱う著作のうち、『両羽博物図譜』および『南郊著述目録』、『長坂氏略世家』、『遠客瑣聞』は酒田市立図書館HP (<http://library.city.sakata.lg.jp/>) の画像によった。それ以外の著作は松森写真館において閲覧したものである。
- 5 『家蔵五玩雑録』第一冊の凡例に「安政六己未以後は曾て其記をも作置たりければ尤明也とす」とあり、安政六年から慶應二年頃の蒐集物については、他の記録をもとに作成したようである。
- 6 例えば、第三冊には酒田の商店から購入した40点の石の領収書が貼り込まれている。
- 7 そのころには作成していた『両羽博物図譜』のうち植物図譜28冊のことと考えられる。

本稿をなすにあたり、松森写真館の松森昌保氏に資料の閲覧・写真撮影および利用について許可をいただいたことについて感謝したい。

本研究は科研費（課題番号17K17598）の研究成果の一部である。